

<学会記録>25. 訪問歯科診療における義歯補綴治療時の血圧変動に関する一考察(東日本歯学会第19回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	森 康仙, 関井 紀晃, 平井 敏博, 越野 寿, 石島 勉, 高田 英俊
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	20
号	1
ページ	119
発行年	2001-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008630/

われた。さらにビデオX線透視検査装置の導入も、特に嚥下機能に問題のある患者に対して、有効な診断要素のひとつとなることが期待されている。このように当センターでは、紹介型医療機関として、一般的な歯科疾患だ

けでなく摂食などの問題を主訴とする患者の紹介による受け入れを進めている。そしてこのような取り組みを通じて、患者のADLの獲得と患者や保護者、介護者のQOLの向上を目指している。

25. 訪問歯科診療における義歯補綴治療時の血圧変動に関する一考察

○森 康仙, 関井 紀晃*, 平井 敏博,
越野 寿*, 石島 勉, 高田 英俊

(北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座・

*北海道医療大学歯学部附属病院地域支援診療部訪問歯科診療班)

【目的】一般に、義歯補綴治療の循環動態へ及ぼす影響は少なく、高齢者の歯科治療の中では比較的安全であるとされてきた。しかし、われわれ研究結果から、義歯使用中の疼痛を訴えている患者の義歯調整においては、安静時に比べて有意な収縮時期血圧の上昇とRPPの増加を確認した。その原因として、術者に対して疼痛部位を明示しようとして、義歯調整過程の初期から、患者は疼痛を我慢しながら大きな咬合力を発揮することが推測された。この問題を解決するための一つの方法として、患者に対して義歯調整の進め方を説明し、調整過程初期からの過大な咬合力発揮が不必要であることを理解させ、調整を行うことに努めている。

今回は、上記の試みの効果を確認することを目的として、義歯調整時の脈拍数、収縮期血圧、拡張期血圧を松下電工製一体型手くび血圧計(FUZZYEW284)を用いて計測し、その結果からRPPを算出した。

【方法】調査対象者は平成12年4月から11月の8ヶ月間に訪問歯科診療を実施した34名の患者中、義歯調整を行った患者から無作為に抽出した15名(平均年齢:72.37

歳)で、延べ測定回数は54回であった。

全身疾患の内訳は、脳血管系40.7%、循環器系33.3%、骨・関節系18.5%、その他7.4%であり、循環動態の変動によって増悪化が引き起こされ易い脳血管系疾患と循環器系疾患が基礎疾患の74.0%を占めていた。

【結果および考察】脈拍、収縮期血圧、RPPの変動においては、平成11年度の結果では、義歯使用中の疼痛を訴えている場合に増加傾向が観察されたが、12年度は、処置前、処置中、処置後、いずれも安定した数値を記録していた。

拡張期血圧の変動においては、平成11年度、平成12年度ともに処置前、処置中、処置後の顕著な変化は観察されなかった。

以上の結果から、義歯使用中の疼痛を訴えている場合に観察された収縮期血圧およびRPPの有意な上昇の原因は疼痛であり、この上昇は、患者に義歯調整の進め方を十分に理解させ、不必要な疼痛を惹起させないことによって回避できることが明らかとなった。

26. 本学地域支援診療部の訪問歯科診療における一考察

○関井 紀晃, 越野 寿, 平井 敏博*,
高田 英俊*, 石島 勉*, 川上 智史,
坂口 邦彦, 大友まどか

(北海道医療大学歯学部附属病院地域支援診療部訪問歯科診療班・

*北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座)

【目的】本学は、平成7年より訪問歯科診療を開始しているが、年々患者数が増加しており、平成12年4月より本学では専任の歯科医師、歯科衛生士の各1名を配置し地域支援診療部訪問診療班として組織の充実を図ってい

る。そこで、要介護高齢者の様々なニーズに応えられるよう現在の訪問診療についての評価及び意義を検討した。

【方法】平成12年4月から11月にかけて訪問診療班が担